

〔研究ノート〕

ヨエ・ホロウハ

—チェコの日本美術コレクター—

ヨーロッパを訪れると、充実した日本美術コレクションをもつ美術館に各地で出会います。日本の漆工芸は16世紀後半から、磁器は17世紀半ばから数多く輸出され、貴族の館の装飾品として大変好まれましたが、ヨーロッパにおいて絵画や彫刻なども含んだ体系的な日本美術コレクションが形成され始めるのは、主に19世紀後半から20世紀前半にかけてです。19世紀後期は、日本の鎖国体制が終焉し、新政府の近代化政策のもと海外との交流が活発になり始めた時期であり、多くの欧米人にとって日本は好奇心が刺激される地でした。交通機関の発展により可能になった世界周遊旅行も遠い国々への興味を高め、欧米で開催された万国博覧会も異文化に親しむきっかけとなりました。ヨーロッパにある日本美術コレクションの核となるのは、この時期に活躍した日本美術愛好家たちの蒐集した作品であることが多く、エドアルド・キオッソーネ(1833~98:ジェノバ東洋美術館)、エミール・ギメ(1836~1918:ギメ美術館)、ウィリアム・アンダーソン(1842~1900:大英博物館)、アドルフ・フィッシャー(1856~1914:ケルン東洋美術館)などの名が著名なコレクターとして挙げられます。彼らの多くは、お雇い外国人として日本に滞在するか、もしくは世界旅行の中で日本に立ち

寄っています。触れることが可能なほど近い存在になりながら、もの珍しい異文化としてまだ遠さを感じさせる、適度な距離が保たれていた時代と言えるでしょう。

チェコ共和国の首都、プラハの中心地にあるナールステク美術館も19000点あまりの日本美術品を所蔵していますが、それらの購入は、プラハやウィーン美術商を通じて、1860年代に始まっています。美術館の創立者ヴォイタ・ナールステクは、ヨゼフ・コジェンスキーなどの旅行家たちとの親交が深く、旅行家たちが日本から持ち帰った品々もコレクションに加えられていきました。コジェンスキーは『ジャボンスコ』という旅行記を残しており、日本の景色や美術品の美しさなどを語っています。また、外国人の泊まるホテルには骨董を売る商人がしばしば訪ねてくることなども記されています。

この本を読み、日本と日本美術に恋をした少年がヨエ・ホロウハ(Joe Hloucha・本名Jozech・1881~1957)です。ホロウハはプラハの北東にあるボドコバーニに、ビール工場を営むヨゼフ・ホロウハの次男として生まれました。コジェンスキーは彼の母方の伯父にあたります。ホロウハは旅行記などを通じて10代半ば頃から日本をはじめとした非ヨーロッパ世界に興味を持ち、作品を積極的に集め始めます。

彼の日本に対する知識の深さは、1905年にプラハで出版された処女作『嵐の中の桜』によく現れています。これは日本に滞在するチェコの青年と日本の少女サクラとの恋愛小説であり、好評のため再版を重ねました。ホロウハはまだ日本を訪れたことがないのにも関わらず、この本の中で日本の街並や風俗を細やかに表現しています。

本の成功もあり、1906年、ホロウハは念願の日本への旅に出ます。大阪や京都、奈良、東京などを観光しながら(図1)、絵画や陶磁・漆工、玩具や日常雑器に至るまで数多くの作品を買い集めました。5ヶ月ほど日本に滞在した後、国に戻ったホロウハは日本に関する知識や興味をビジネスに活かします。その代表が、1909年にプラハの中心部にオープンした喫茶店、JOKOHAMA(ヨコハマ)です。そこはホロウハが集めた日本の絵画や仏像、提灯などで飾られ、ウェイトレスたちは日本の着物を着て、日本髪を結っていました(図2)。また、日本を題材とした小説も書き続けており、その中には、日本の昔話を挿絵入りで紹介した作品などもあります。

ホロウハはヨーロッパの美術商から作品の購入を続けるとともに、1926年に再び数ヶ月日本に滞在し、多くの作品を買い求めます。こうしたホロウハのコレクションを包括的に紹介したのが、1929年にプラハで開催された展覧会です。展覧会には日本を中心に、中国やアフリカ、オセアニアなどの作品が展示されました。会場では壁いっぱい作品が飾られていましたが、その中の一角には柱で区切られた床の間風

のスペースも設けられていました。

図3はその一角を写した写真です。中央に飾られているのは、現在はナールステク美術館の所蔵となっている池田孤邨筆「五節句図」三幅のうちの二幅です。絵画の前には花が活けられており、日本の掛軸の飾り方をよく伝えています。

自らのコレクションを公開する美術館を設立するというホロウハの夢は叶いませんでしたが、ホロウハが亡くなる数年前にコレクションの多くは国へと渡り、ナールステク美術館の所蔵となりました。現在、ナールステク美術館所蔵の日本美術コレクションの1/3近くがホロウハの旧蔵品で占められており、ホロウハはチェコ最大の日本美術コレクターの評を得ています。ホロウハの集めた作品は、貴重な浮世絵や精巧な工芸品だけでなく、手拭や草履といった生活雑具まで大量に含んでいるため、その質が疑問視されることもあります。それはホロウハが伝統的日本文化そのものに愛着を抱いていた証しでもあります。民俗学的な関心があるのはもちろんのことですが、ホロウハの展覧会での床の間風の設えや、JOKOHAMAでのウェイトレスの本格的な和装を見ると、単に特異な民俗として興味を向けるのではなく、日本文化の美しさ、楽しみ方を伝えたいという想いが窺えます。ホロウハのもとには、チェコのキュビズムを代表する画家であり、絵本作家としても有名なヨゼフ・チャベックをはじめとする新鋭の芸術家たちが訪ねて来ており、ホロウハの日本美術コレクションは彼らの芸術活動に少なからぬ影響を与えました。チェコの絵本やアニメに見られるシンプルで情緒ある表現の中に日本の美意識と通じる点を探すのも楽しいかもしれません。

(図1~3は、『Joe Hloucha』ナールステク美術館、2007年より転載させて頂きました。

学芸部部員 宮崎もも)



図1 大阪滞在中のホロウハ



図2 JOKOHAMAのウェイトレス



図3 展覧会場一角

季刊 美のたより No.166

平成21年4月5日

発行 大和文華館